

聖書の言葉

平和を実現する人たちは
幸いである。
その人たちは
神の子と呼ばれる。
マタイによる福音書5章9節

2012年8月12日（日）発行

宗教法人

野毛山キリストの教会

〒220-0042 横浜市西区老松町30番地

シャロームタイムズ

平和聖日

8月1日曜日は、平和聖日として、平和について考え、過去の戦争の過ちを忘れないように、風化されないようにと覚えてずっと礼拝をささげて参りました。今年も去る8月5日（第1主日）平和聖日として礼拝をささげました。

平和の源なる命のパン

奈良 昌人牧師

【ヨハネによる福音書6章41・59節】
主イエスは「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」（マタイ5章9節）と宣言されました。

私たちは太平洋戦争の敗戦から67年を迎え、ヒロシマ、ナガサキの原爆の記憶に昨年の東日本大震災後での福島第一原発事故による放射線被害の恐怖が重なり、改めて「平和とは何か」という問いの前に立たされています。見せかけの平和に甘んじてきた私たちは今、「戦争がないから平和だ」とはいつまで言えないことを学びました。そして、戦争が始まるきっかけ、原発事故の原因を考える時、人間の罪深さを思い、私たちが人間の決断には自己防衛の思いが潜んでおり、たとえ戦争に反対でも正直に反対することができず、組織的なものの中にいるのであればそれはなおさらのことであり、先の大戦は戦争をしても負けるということをリーダー格の誰もが思っても言えなかったために何百万人もの人々の命が失われたと言われます。原発においては、原発建設反対者が声を大にして叫んでも、「絶対安全」と言う声に押されて建設され、しかし今やその「安全神話」が完全に崩れ去っています。

遑って主イエスの時代、ニコデモのように主イエスを信じる議員もいましたが、夜に人目を避けて主イエスを尋ねているように、ユダヤ教指導者たちの目を恐れ、リーダー格の人物は公に「主イエスを信じる」と言い表すことができませんでした。もし、公表するならユダヤ人社会から追放されてしまうからです。ここに、「神からの誉れよりも、人間からの誉れの方を好ん」（ヨハネ12:43）でしよう、人間の罪深さを思います。対し主イエスは人からの誉れを徹底的に拒まれました。5千人の給食の奇跡に人々は主イエスを王にしようとしていますが、主イエスは拒否されます。そしてその後、主イエスが「わたしは天から降って来たパンである」と言われると人々は「これはヨセフの息子のイエスではないか。」なぜ、そんなことを言うのかとつぶやき始めます。「天から降って来た」とは、目に見えない世界に目を向けること、つまり霊

の目で見えることを示し、「パンである」というのも、目に見える肉の糧であるパンではなく、永遠の命を得るためのパンのことを言っておられます。次に、主イエスの「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」（ヨハネ6:51）の言葉に人々は「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」とさらに激しく議論し始めました。対し主イエスは「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。」と言われます。これは聖餐式のことです。私たちの日常において「食べ物」は私たちを変えます。体に悪いものばかりを食べれば悪くなり、良いものを食べればよく変えられます。主イエスの十字架の死は、罪に飲み込まれて敗北し、一見無くなったかのようにしたが、主は3日目に復活され、死（罪）に勝利されました。神さまは、死をも打ち破る力で罪人の私たちを御許に強く引き寄せてくださり、パンを与え、血潮をくださるのです。毎週の聖餐式は、この主の十字架と復活、そして再臨（パルシューシア）を覚えると共に、キリストの命が私たちに新しく与えられることを意味します。私たちの内側から私たちを神と人を愛する者に変えてくださる良い食べ物、つまり平和の源なる主イエスが、心の内に住まわれることにより平和を実現する者に変えられていくのです。神に創られた私たちは皆（クリスチャン）でもクリスチャンでなくても、主イエスによって平和を実現する者として生きています。そのことに気づき、キリストを受容する者に変えていくことが神さまの御心であり、そこに神さまからの誉れが与えられるのです。平和の君、キリストが定められた主の食卓を囲み、パンを分かち合う時、神さまとの、この世を越えた永遠の結びつきがキリストを通して与えられ、真に平和を実現する者の歩みがなされていくのです。

ヨハネによる福音書6章58節

〔8月5日（第1主日）平和聖日〕礼拝説教

奈良 昌人牧師

主日礼拝	44人
平和を語る会	49人



広島（ヒロシマ）

1945年（昭和20年）8月6日午前8時15分。原子爆弾「小男孩」は、第33代アメリカ合衆国大統領ハットマン（トルーマン）の原子爆弾投下の大統領令によって投下された。この1年に亡くなった方 5729人 計280959人

長崎（ナガサキ）

広島の日後の1945年8月9日午前11時2分、B-29（ボックスカー）が長崎市に原子爆弾ファットマンが投下しました。この1年に亡くなった方 3305人 計158754人

去る八月六日に行われた広島平和記念式典の中で、子ども代表として小学校六年生の三保くんと遠藤さんの二人の「平和の誓い」に感動しました。全文を紹介したいと思います。

67年前、一発の原子爆弾によって、広島市の街は、爆風がかげめぐり、火の海となりました。たくさんの方の尊い命が、一瞬のうちに奪われました。建物の下敷きになった人、大やけどを負った人、家族を探し呼び続けた人。身も心も深く傷つけられ、今もその被害に苦しむ人がたくさんいます。あの日のことを、何十年の間、誰にも、家族にも話さなかった祖父。でも、一生懸命話してくれました。一つ一つの命の重み。残された人たちの生きようとする強い気持ち。伝えておきたいという思いが、心に強く響きました。故郷を離れ、広島の小学校に通うことになったわたしたちの仲間。はじめは、震災のことや福島から来たことを話せなかった。家族と一緒に生活できないこと、突然、友だちと離ればなれになりました。今も会えないこと。でも、勇気を出して話してくれました。「わかってくれて、ありがと。広島に来てよかったです。」その言葉がうれしかった。つらい出来事を、同じように体験することはできないけれど、わたしたちは、想像することによって、共感することができます。悲しい過去を変えることはできないけれど、わたしたちは、未来をつくるための夢と希望をもつことができます。平和はわたしたちでつくるものです。身近なところから、できることがあります。違いを認め合い、相手の立場になって考えることも平和です。思いを伝え合い、力を合わせ支え合うことも平和です。わたしたちは、平和をつくり続けます。仲間とともに、行動していくことを誓います。

聖書の言葉

平和を実現する人たちは
幸いである。
その人たちは
神の子と呼ばれる。
マタイによる福音書5章9節

シャロームタイムズ

2012年8月12日（日）発行

宗教法人

野毛山キリストの教会

〒220-0042 横浜市西区老松町30番地

平和を祈る

大瀧 慧

一九四四年、私が東京の小学校で六年生となった年、戦況が悪くなり、空襲に備えて学童疎開が始まりました。親類、縁者などを頼れない小学生は国の決める場所に集団疎開することになりました。我が家では四人の弟のうち、下から二番目、三番目の弟は長野県の母の実家に、一番上の弟と私は学校からの集団疎開に行くことになりました。同じ町内の男女三十人余りが成興寺という栃木県のお寺にお世話になりました。朝起きると本堂の前に並び般若経を唱え、御飯をいただいて現地の小学校へ通う生活がいつからか始まっていました。一年生入学当初から同じ教室で五年



余り机を並べたクラスの人たちとお別れする間もなくそれ栃木の言葉にも慣れ、秋になると兵隊さんに行ってしまうて男手が足りなくなつた農家から「人手が欲しい」と言われ五、六年生の男女が稲刈りのお手伝いをする事になりました。皆生まれて初めてのことでしたが、夢中で刈っているうちに指を切ったりしながらいぶん早く刈れるようになり、とても喜ばれ、何軒も家を手伝いました。そして、大きなおにぎりをご馳走してもらいました。いなごを捕って供出したり、山に焚き木を集めに行ったりし、田舎の生活にどんどん慣れました。お腹をすかせた男子たちが畑のさつまいもを掘って盗み食いしてしまつて叱られることも何度かありました。女子は全員髪の毛にしらみを湧かせました。冬は靴がなくてわら草履で雪道を通うので霜やけだらけでした。村の学校に馴染めない子、病気がちの子、家を恋しがる子と子どもなりの苦労もたくさんありましたが、土地のおばさんやお姉さんたちに支えられ、戦争に勝つためにと励まされて耐えていました。疎開地には空襲などない穏やかな日々がありました。しかし、年が明け、三学期になると六年生は卒業して中学校か女学校を受験しなければならぬからと六年生だけで東京に帰されました。

吹き落ちています。家中の窓硝子が破れていました。幸い幼い二歳の弟も家族皆無事でしたが、爆風で飛ばされたという幼児が二人抱かれてきました。(父が医者で近隣の救護所になっていました。)子どもだから助かったのだろうという事で骨折も何もなく、声を出せていて皆ほつとしましたが、その後運ばれてきた中年の女性三人はお気の毒にも亡くなつていました。通りがかりの方々らしく身元捜しが大変でした。アメリカの偵察機が紛れ込み小爆弾を一発落としたりしたものが我が家から百メートルくらいの道に落ちたのでした。

これ以来私は「次には直撃されるのでは」と不安で御飯が食べられなくなつてしまいました。戦争は嫌だ、恐ろしいと思いました。自身の弱さを思い知らされ、恥じ入りました。我が家にも危険が迫つているというので救護班で移動できない父達を残して小さい弟と母と私は二人の弟がいる母の実家にお世話になることになりました。夜まで待ち、やっと乗れた汽車は大宮で空襲にあい、翌朝まで止まつていてしばらくして上田に着き、次の汽車に乗継のため待つていた待合室のベンチでは私の荷物が大小全部常習の泥棒に盗まれました。それでも汽車に乗れて目的の戸倉に着くことができました。降り立つて眺めた山裾から伸び広がる麦畑の青さを見た時、あの麦の色の青さは今もこの目の底に残っています。たぶんここには敵機はいないのだと思つて残っています。自分の荷物が全部亡くなつてしまつていふことなど忘れていました。

母の実家で過ごし始めて一週間くらいして、四月一日の大空襲で東京の家は焼けてしまい、救護班も解かれて父も長野に来てお世話になることになりました。大家族をやさしく受け入れてくれた母の実家があつて私たちは生きてこられました。八月一日の終戦の日がきてから後、広島、長崎の原爆、沖縄戦、そして、各地の悲劇、惨劇をひとつひとつ知りました。私の受けたものなど微々たるものです。しかし、幼い子どもたちに二度と同じような恐れを味わせたくないと思ひ、切に願ひ続け、「戦争反対を叫び続けよう」と意識してきました。

信徒の友8月号を読み、「平和」とは決して「戦争がない」状態のことではないことを知りました。ヒロシマ、ナガサキを経験した私たちが今はフクシマに怯えています。また、今年には沖繩が返還されて四十年目の夏です。こうしている今も平和とは程遠い生活を強いられる人が大勢いるのです。私たちの住む世界は決して平和ではないのです。

聖書の語る「平和」とは「完全に充足した状態のことです。多くの人が傷つき多くの被造物が呻く私たちの世界は決してシャロームとは言えません。しかし平和の福音を述べ伝える使命が私たちに与えられており、そのことよって平和を作り出す働きに参与させていただくのです。感謝いたします。

今年の絵本

おとなになれなかった弟たちに

米倉 斉加年
このころの友8月号で紹介のあった俳優米倉 斉加年さんの「おとなになれなかった弟たちに」を選びました。

(以下、一部このころの友より抜粋)

この絵本は米倉さんの小学校四年の時の体験を語つた絵本です。食べ物十分になかったので母は母乳が出なくなり、時々あつた配給のミルク一缶、弟の大切な食べ物を僕はひもじくて、そのミルクを盗み飲みしてしまいました。僕は弟がかわいくて仕方がなかったのに飲んでしまったのです。しばらくして弟は入院し、母と僕に見守られて死にました。病名はなく、栄養失調でした。…という内容の作品で、最後に、「弟が死んで九日後の八月六日に、ヒロシマに原子爆弾が落とされました。そして、三日後にナガサキに。そして六日たった一九四五年八月十五日に戦争は終わりました。ぼくはひもじかったこと、弟の死は一生忘れません」と記しています。

戦争体験をお話くださった大瀧姉のお話とも重なり、とても考えさせられる絵本でした。

平和は
忘れないことから



八月や
六日 九日 十五日

